

『徳島文学』創刊記念祝賀会

平成三十年五月二十七日、ホテルクレメント徳島に於いて『徳島文学』創刊記念祝賀会が執り行われ、来賓や会員を含め三十二名の方に参加いただいた。

設立から一周年を迎えた徳島文学協会の活動などを紹介したオープニングムービーが流され、佐々木会長の挨拶の後、四国大学の松重和美学長から祝辞をいただき、芥川賞作家の吉村萬吉氏による乾杯のご発声で祝宴の幕が開けられた。

また最新作を含む全六篇を収録した短編集「郷里」を出版した佐々木会長へ、会員の藤代淑子さんから、第三十五回大阪女性文芸賞を受賞した会員の久保訓子さんへは吉村萬吉氏から花束が贈呈された。

その後、参与として新会員になられた歌人の田丸まひるさんから激励の言葉をいただき、司会の中村あゆみさんからマイクを向けられた『徳島文学』の執筆者が、それぞれの苦労話などを語った。

最後に佐々木会長からご来場の皆様にお礼の挨拶があり、出席者全員で記念写真撮影して散会となった。



『徳島文学』Volume2 二〇一九年春、発行。

徳島文学協会発行の文芸誌

『徳島文学』Volume 2』の原稿を募集します。

徳島文学協会では、年一回文芸雑誌を発行しています。芥川賞作家やプロの文学者を筆者に招き、地方の文芸誌としては類を見ない商業雑誌に匹敵するクオリティの雑誌を目指します。会員の皆さまの優秀作品をプロの作家と同じ誌面に無料で掲載いたします。皆さまの傑作をお待ちしています。会員の方全員に、最新号を進呈します。

- ◆応募資格
徳島文学協会会員限定
- ◆応募作品
小説・評論・随筆・詩・短歌・俳句など広義の文学作品、および書評。未発表作品に限る。
- ◆原稿規定
枚数不問。掲載時に原則、テキストデータの提出が可能なもの。

はページ番号をつけてしっかりと綴じてください。応募作品の返却はご遠慮ください。

- ◆締め切り
二〇一九年一月十日(木)当日消印有効
徳島文学協会事務局まで郵送ください。
- ◆掲載発表
応募された作品は会長を含む徳島文学制作実行委員会にて厳正審査し、掲載可否を決定します。掲載が決まりましたら、ご本人にご連絡いたします。掲載作品の著作権は掲載から一年間、徳島文学協会に帰属します。

- ◆宛先
〒七七一-三三〇一
徳島県名西郡神山町
阿野字方子一〇三
徳島文学協会事務局
「原稿募集」係
電話 〇八〇-六二八四-〇二
九六(日曜祝日を除く九時～十七時迄)

生きた言葉を拾う

なかむら あゆみ

七月に入り雨が続く。レインコートで外に出ようものなら、ムツとする暑さにたじろぐ。おかげで普段から「ほぼ家にいる私」は、「いつでも家にいる私」になってしまった。けれど、家の中から眺める雨の景色は嫌いではない。サーサーと天から降り続く雨を眺めていると、自分の心の内側に何年も貼りついていた記憶がずるっと剥がれ、どすんと私の目の前に落ちてくる。 あっ、落ちてきた。

二十年前、ラジオリポーターをしていた頃は、今日のような雨の日も外の様子を生放送で伝えていた。ある日「今日は朝から生憎の雨。早く晴れてほしいです」と喋った。すると「今年は空梅雨だから、恵みの雨が降って喜んだ農家の人は多いんだよ」と先輩から指摘された。そうか「晴れは良くて、雨は悪い」は自分視点の言葉。感じたことを素直に話すのはもちろん大事だけれど、出来る限りの想像力を働かせて、言葉は選ばないといけないのだと気づかされた。一期一会の出会いが中心のリポートだったため、どれだけ気をつけていても失言や失敗はしょっちゅうだったけれど、インタビュする人や放送を聴いてくれる人の「心を汲む」ことだけは忘れないよう、言葉を大切に扱うことを意識し

ていた。ある日、畑仕事をしている八十歳のおばあさんを偶然見かけ、声を掛けた。聴くと七十歳で初めて海外に行つて以来、毎年数カ国旅行するのでと微笑みながら話してくれた。あの時、私自身がその前向きな生き方と言葉にどれだけ励まされたか。それは鳴門市大麻町の何気ない場所。そこでこの話を聞けたことに価値があり、どんな人もそれぞれのストーリーを持っていると痛感した瞬間だった。

この一年で私はペンを持つようになった。書きたいことはマイクで伝えていた時と同じ。徳島で暮らす人たちの日常や生の言葉。そこに含まれる温もりや心情をいつの日か自分の言葉で表現したい。

気がつけば、雨は止んでいた。

『見る』ということ

魚井 美佐

俳句を始めた頃の私は、朝刊と俳句に関する本以外あまり読まなかった。でも、俳句を続けていくなら、もっとたくさんの知識や経験が必要だと感じていた。

そんな折、昨年吉村萬吉先生の講演会受講をきっかけに著作の『生きていくうえで、かけがえないこと』に出会った。『見る』の章の『写生に際して多くの描き手が対象をちゃんと見て

いない、と言った。目の前の花を見ずに、頭の中の花を描いているのだという。』、この箇所にも共感した。

作句をするときも、写生は重要である。実際、まだまだ目の前のものをきちんと捉えるということに不安がある。目に見えるものを新しい情報として取り入れるより、すでに頭の中にあるものを表現するほうが非常に楽なのだ。それゆえ無意識に、頭の中にあるものを信じたくなるのかも知れない。思い込みはそうやって起こるのだろう。

そういえば、人の思い込みに驚いたことがある。

十年程前、友人が公共施設のカフェコーナで勤務をしていたので割と頻繁にコーヒーを飲みに行っていた。彼女とは十歳以上も年が離れていたが、ただただ一緒にいると楽しいので親しくしていた。来店しては、カウンター席に座っていることがほとんどだった。その場面を、コーヒー豆の卸業者の男性がたびたび見かけたようだった。そして、彼が彼女に私のことをコーヒー豆の営業ではないのか、と尋ねたらしい。意外なことだ驚いた。

年が離れていたのも、友人には見えなかったのだろうか。おそらくは、わずかな不安が事実を歪めて捉えさせるのだろう。頭の中に描く事実とは非常にやっかいだ。

徳島文学協会への入会前後

宮田 憲治

徳島文学協会へは、佐々木義登先生の勧めで入会しました。

これが「正解です」というものは、「文学」にはないので、というのが心境です。

現在は、「自分の常識」を懐疑することに力点を置いて書いています。

酒席で、佐々木先生が若い会員に「八十路の女性を真剣に愛して尽くしてみたまえ」と語られていたことを、あらゆる方向に思いを巡らして思案をしています。

高校へ進学する孫達と別居して老人家族になり、孫達の世代と「文学談義」することなんて夢物語だったのですが、徳島文学協会に入会することで、現実のものになりました。

団塊世代が信奉する作家は、夏目漱石、谷崎潤一郎、川端康成、太宰治、三島由紀夫あたりでしょうか。入会して若い世代が勧めてくれた作家は、町田康、窪美澄でした。

窪美澄の『ふがいない僕は空を見た』を繙(ひもと)くと冒頭から「たとえば、高校のクラスメートのように、学校や予備校帰りに……(中略)セックスの二、三発もきめ……」で始まり、度肝を抜かれてしまいました。入会以前であれば、も

う此処を読むだけで匙を投げていたことだろうと思います。

最近、「二期一会」と「文学にとつての命綱」という言葉についてよく考えます。私にとつての命綱はイエス・キリストで、現代っ子には一笑に付されるのではないかと思っています。

窪美澄の世界では、アニメのコスプレによって創造される「仮想世界」でしょうか。虐待され続ける主人公は、偽りの優しさにさえも救いを感じる消極的な生き方をしますが、笑えないどころか共感を覚えてしまいます。

小説を書くことは、自分自身の現実から逃避できない辛いものですが、真剣に生死と対峙できることに、魅了されています。

読書日和

— 徳島文学創刊号によせて —

阿部 桃

藍色の表紙が目を惹く。その中身の作品を一つずつ読んでいく過程が楽しかった。読書は没頭、世界に入り込めることが心地よくて、浮かんできた人々や風景や登場人物の手に取ったものまで、頭のなかで再生される感覚が好きだ。

小説は好きだ。マンガも好きだ。マンガは目で見ている部分が大きい気がする。

小説は目だけではわからないように思う。目に直接、訴えかけてくるものは衝撃でぐっとかまれる。視力はABC。感受性の測り方なんてあるのだろうか。

知性がある読書はめんどくさい。

どんどん読み進めていきたい。

でも、引っかからない作品はだめらしい。

そんなものが書けるだろうか。

きちんと製本された冊子のなかに自分が書いた小説が収まっているのは、単純に嬉しかった。なかなかできなかったものが形になり、良かったと思っている。春の時点でそう感じていたら、はや夏に足を突っ込んでいる。暑苦しくて、どうにもならない。

これで終わったと思わずに新たなことにチャレンジしていきたいと思って汗をふく。涼しくなる頃には今、考えているものが形としてはつきりするように頑張ろうと思う。



「とと」掲載エッセイを募集します

文学に関することなどを題材にした八百字以内の原稿を、ワード形式にして事務局へお送りください。(送信時には件名に『とと掲載用』と入れてください)

「とと」は春、夏、秋の年三回発行ですが、一回につき掲載できるエッセイは二〜四作品です。

文学イベント案内

「パソコン倶楽部」

～みんなで文芸冊子をつくらう～

パソコンで文芸作品を創作するための知識や技術を講習します。目標はパソコンで作ったデータをもとに、みなさんのオリジナル文芸冊子を作ること！ワードでの基本的な文字入力、便利な編集方法等をお伝えします。個々の質疑応答を中心に進めたいと思いますので、ご質問等がございましたら、お申し込みの際に事務局までお伝えください。

■開催日 ①八月二十五日(土) 十四時～十六時

②九月十五日(土) 十四時～十六時

■場所 徳島県立文学書道館

■講師 パソコン倶楽部部長 魚井美佐

■参加費 会員一〇〇〇円、非会員一五〇〇円

■定員 十五人

※ご自身でお使いのノートパソコンをご持参下さい。

※用意できない場合はお申込の際にご相談下さい。

「小説広場」～みんなで合評会～

あなたの書いた小説を合評会に出してみませんか。作者であるあなたにも、見えなかったものが見えてくるはず。会に参加して創作を志している人の作品を読むことで教えられることもあるはず。作品を提出して下さる方、作品はなくても合評会に参加して下さる方を募集しています。

■開催日 ①九月二十九日(土) 十四時～十六時

②十月三十一日(水) 十時～十二時

③十一月二十八日(水) 十時～十二時

■場所 徳島県立文学書道館

■アドバイザー 藤代淑子、久保訓子ほか

■参加費 会員一〇〇〇円、非会員一五〇〇円

■定員 十五人

※合評作品は、随時受付しています。

詳しくは事務局までお問い合わせください。

「短編小説実作講座」

気軽に学んでいただける小説実作講座の入門編。小説の基本から具体的な表現方法まで分かりやすく解説。初めて小説を書く方でも、コツをつかむことで短編小説を完成させることができます。

■開催日 ①十月二十七日(土) 十九時～二十時半

②十一月十七日(土) 十九時～二十時半

■場所 徳島県立文学書道館

■講師 佐々木義登

■参加費 会員一五〇〇円、非会員二五〇〇円

■定員 十五人

歌人・田丸まひるさんトークイベント

作ってみよう！

はじめての短歌～夏の風物詩を詠む～

徳島在住の歌人・田丸まひるさんと一緒に短歌を作るワークショップも開催。初心者大歓迎です。気軽に楽しみながら短歌を学んでみましょう。

■開催日 八月四日(土) 十五時～十六時半

■会場 BOOKS平物徳島店

2Fイベントスペース

■参加費 無料

※書籍販売、サイン会もあります。

徳島新聞 阿波しらさぎ文学賞記念行事

授賞式&トークイベント開催

■開催日 九月九日(日)

■会場 徳島市・徳島新聞社ホール

■参加費 無料

※受賞者とイベント詳細につきましては、徳島新聞紙面にて八月下旬発表予定

事務局からのお知らせ

二〇一八年度より学生対象の年会費が追加されました。該当される方はお申し出ください。

今年度より年会費が二千元になり、飲食を含まないイベントに一律五百円参加できます。学生証のコピーを事務局にご提示下さい。

ご入会のお申し込み方法

- 一 事務局に資料をご請求ください。入会案内一式をお送りいたします。
- 二 会の運営にご賛同いただけましたら、同封の郵便振替用紙をご利用の上、年会費(一般七千円、学生二千円、法人一万三千円)をご納入ください。
- 三 振替用紙の、ご依頼人の欄にご住所およびお名前を明記ください。
- 四 郵便局の受領証をもって徳島文学協会の領収書に代えさせていただきますのでご了承ください。当会の領収証が入用の場合はお申し出ください。

「とと」：古代エジプト文明の知恵の神

「トート」に由来する。

ご入会や講座のお申し込み・お問い合わせは徳島文学協会事務局まで

〒771-3201 徳島県名西郡神山町阿野字方子 103 TEL:080-6284-0296

society@t-bungaku.com http://www.t-bungaku.com/